

主 題：教会の青写真
聖書箇所：随 所

主イエス・キリストによって救われた信仰者一人ひとりにそれにふさわしく生きていきなさいとみことばは命じます。なぜなら、もしあなたが救われた者にふさわしく生きるなら、あなたを通して神様の栄光が現わされるからです。もっと言えば、あなたが信仰者らしく、救われた者にふさわしく生きるならば、あなたを通して私たちの救い主イエス・キリストが世に明らかにされていくのです。ですから救われた者にふさわしく生きていきなさい、そのように歩んで行きなさいとみことばは教えました。確かにこのような責任を私たちクリスチャン一人ひとりが負っているのですが、この責任は個人だけのものではなく、間違いなく救われた者たちが集まっている教会の責任でもあります。個人もそうですが、教会もこの世に対してイエス・キリストこそがまことの救い主なのだというメッセージを発していくのです。もちろん私たちは言葉を使ってこのメッセージを語るのですが、それだけではありません。きょう私たちがみことばを通して見ていきたいのは、神はどんな教会を求めておられるのかです。人間の考えに基づいた教会はたくさんあるでしょう。しかし、みことばは神が望んでおられる教会とはどんな教会なのかを私たちに教えます。個人として主の前を正しく歩み、救われた者としてそれにふさわしく生きるだけでなく、教会としてもそのように生き、この世に私たちの素晴らしい主を証していく、それが私たちに与えられた大きな使命だということです。

皆さんにこんな初歩的な質問をさせてください。神様が私たちに与えてくださった戒めの中で最も大切なものは何でしたか——。モーセは「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」（申命記6：5）と言っています。主ご自身も、ある律法の専門家からその質問を受けた時にマタイ22：37で「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛」しなさい、「これがたいせつな第一の戒めで」と言われました。同時に39節で「『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。」と言われました。皆さん良くご存じです。このことを主が命じておられる。このことをみことばが私たちに教えてくれるのです。

ですから、個人としても、同時に教会としても神を愛する教会でなければならないし、隣人を愛する教会でなければならないと、私たちはこのみことばから確信を持つのです。この時間、主を愛する教会とはどういう教会なのか、隣人を愛する教会とはどのような教会なのかを見ていきます。願わくばその学びを通して、私たちが少しでもその教会に近づいていけるように、個人として、教会として成長できるようにご一緒にみことばを見ていきましょう。

A. 「主を心から愛する教会」

言い方を変えれば、神様に対する愛はこういった形で表すことができる、神を愛すると言うことは簡単ですが、それをどのように示すのか、今から7つのことを見ていきます。

1. 「主が喜ばれる礼拝を捧げる」ことで

まず最初に、神を心から愛する教会というのは主が喜ばれる礼拝を捧げる教会です。

1) 「礼拝」

まず、それぞれが異なった定義をしないように「礼拝」についてまとめておきます。礼拝というと、神に対して栄光、誉れ、感謝を捧げることです。神を心からたたえるのです。天にあって天使たちが、また救われた者たちが神をたたえている様子が黙示録4章に出てきました。

2) 「神がお喜びになる礼拝」

しかし、すべての礼拝を神がお喜びになるものではありません。喜ばれる礼拝とそうでない礼拝が存在します。あのサマリヤの女とイエス様がお話しになった時に、イエス様が彼女に対して礼拝に関して非常に大切なことを教えています。ヨハネ4：23に「**真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。**」とあります。まさに神が喜ばれる礼拝は父なる神を「**霊とまこと**によって」礼拝することです。ということは自分勝手な礼拝を捧げる、自分が満足しても神を満足させない礼拝というのは虚しいものです。神が喜ばれる礼拝をささげるために必要なことは「**霊とまこと**」の二つでした。

(1) 「**霊**」

「**霊**」とは何かというと、「心」と訳せます。人の心のことです。先ほどの大切な戒めを思い出してください。神を心から愛しなさいと言われました。ですから私たちが神を礼拝するに当たっても当然私

たちが覚えるべきことは、我々の心からなる礼拝であるかどうかです。形だけのものになっていないかどうかです。

(2) 「まこと」

「まこと」というのは真理、真実です。私たちが礼拝を捧げる時に、自分勝手な礼拝を捧げてはならないということです。パウロはローマ10章の中で、人々が神に対して熱心である姿を見ました。でもパウロはこう言います。「しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。」(ローマ10:2)と。とつても熱心かもしれない、でもその礼拝が神のみことばに基づいたものでなければ、自分たちはそれで満足するかもしれないけれども、神を満足させることにはならないということです。ですから、「心から礼拝を捧げなさい」、しかもその礼拝は神のおことばに基づいたものです。

多くの人たちは、礼拝を全く勘違いしている。参加することが大切なのだと、集まってくることで目的を達成したように思っている人がいます。毎日が礼拝なのに、特別な場所や時間に限定します。また、ローマ書が教えたように熱心でありさえすれば、それで神がお喜びになるのだと、忠実さと熱心さを混同している人がいます。また、何となく礼拝が慣習化されているので、これまで大切に守ってきたものをただ守り続けて、何も考えずに出席して今週も礼拝を守ることができた。また、ある人は礼拝に出席して神が喜ばれることさえしておけば神はきっと私の欲しいものを与えてくれるに違いないと、自分の願望をかなえるための手段とと思っているかもしれない。もっとリストは続きますけれども、こういった自分勝手な聖書に基づいていない礼拝を幾ら捧げても神はお喜びにならないのです。

神がお喜びになる礼拝とは、私たちが神の真理を聞き、その真理によって心が刺激され、心が活気づけられる、その心から湧き上がってくる神への称讃であったり崇敬なのです。みことばを通して示される、その神の偉大さに私たちは圧倒されて「神様、あなたは偉大なお方です。あなたに並ぶような存在はこの世にどこにも存在しません」と、内側からあふれ出てくる神への感謝、まさにそれが礼拝なのです。私たちがこうして週の初めの日とともに集まって神に祈る時に大切なことは、我々一人ひとりの心が本当に礼拝するにふさわしい心であるかどうかです。「一人ぐらい……」ではないのです。あなたが大切なのです。あなた自身の心とからだを整えられて、ベストの状態とともに神様を礼拝することです。今、私たちは共同の礼拝を捧げていますが、あなたの捧げる礼拝を神は喜んでお受けくださるかどうか、そのことをいつも考えながら私たちは神を崇めることです。自分の動機をしっかりと見詰めることです。

2. 「主のおことばに服従する」ことで

主を心から愛する教会というのは、神のおことばに服従する教会です。

1) サウルが王になった時：Iサムエル12:20

ちょうどサウルが王になった時に、預言者サムエルはこう言っています。「恐れてはならない。あなたがたは、このすべての悪を行なった。しかし主に従い、わきにそれず、心を尽くして主に仕えなさい。」(Iサムエル12:20)と。こうして彼は「主」に従うことを命じるのです。ところがご存じのように、Iサムエル15章の中でもう罪を犯すのです。

2) サウルが主の命令に逆らったとき：Iサムエル15:22、Iコリント7:19、伝道12:13

サウル王がアマレク人を聖絶しなさいという神の命令を無視して家畜を残しておいた。なぜ残したのかと聞かれた時に、殺してしまうのはもったいないから、神様に捧げるにふさわしいよい家畜だけを残しておきましたと答えます。私たちが聞かなければいけないのは神のおことばです。Iサムエル15:22で「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」と言われています。神がはっきりと教えてくださったのは、どんないけにえよりも、どんな奉仕よりも、神がお喜びになるのはあなたや私が神のみことばに服従することです。神の言われたことを信じてそのように生きることです。もしあなたが神様を喜ばせたいと思っているのならそれしかありません。この方は私たちの主であられ、このように生きろと言われたのです。奴隷である私たちの責任は当然その命令に服従することです。

パウロもIコリント7:19で「割礼は取るに足らぬこと、無割礼も取るに足らぬことです。重要なのは神の命令を守ることです。」と言っています。「神の命令を守ること」が神があなたに求めておられることです。あなたの主人である神があなたに求めることです。ソロモンは伝道者の書の最後12:13で「結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。」というメッセージをしています。このことを神が私たちに望んでおられると。神様への愛はどうやって表すのか——。神のみことばに従うことです。

3. 「主との交わりを楽しむ」ことで

三つ目に、神様への愛は主との交わりを楽しむことで表すことができます。

【主イエス昇天後】 使徒 1 : 12 - 14

使徒 1 章にイエス・キリストがオリーブ山から天に凱旋して行かれる光景を人々は見ていたことが記され、12 - 13 節に誰がそれを見ていて、その後誰がエルサレムに戻っていったのかが記されています。使徒 1 : 14 には「この人たちは、婦人たちやイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちとともに、みな心を合わせ、祈りに専念していた。」と書いてあります。この「専念していた」ということばは現在形の動詞です。「たゆまなく」、「たゆまず」、「連続して」祈っていたということです。この人々はイエス様が天に凱旋した様子を見て、祈り続けていたと。

ジョン・マッカーサー先生はこのことについて大変興味深いコメントを記しておられます。「彼らが祈っていたのは、彼らが昇天されたイエスから物理的に引き離されたからであり、祈りが主イエスと交わる唯一の方法だったから」と。今までともにいたイエス様が天に凱旋して行かれ、「今彼らに残されたこの神との交わりはこの祈りを通してである」と。地上におられた時と同じように、彼らは祈りをもって神との交わりを楽しんでいたのです。

【エルサレム教会】 使徒 2 : 42、12 : 5

この後、教会がエルサレムに教会が誕生します。エルサレム教会がどんな教会だったのかが使徒 2 : 42 に記されています。「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」と。このエルサレム教会は祈る教会だったのです。先に進んで使徒 12 : 5 に、ペテロが捕えられた後この教会は何をしていたのかが書かれています。「こうしてペテロは牢に閉じ込められていた。教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。」とあります。

【アンテオケ教会】 使徒 13 : 3

また、この後パウロたちによる宣教旅行が始まっていきます。今度はアンテオケにある教会です。彼らがパウロたちを送り出していくのですが、使徒 13 : 3 を見ると「そこで彼らは、断食と祈りをして、ふたりの上に手を置いてから、送り出した。」とあります。

神が用いられた教会というのは、間違いなく祈る教会でした。正直言って私たちの信仰生活の中で「祈り」は結構おろそかにされていませんか？神のみわざを期待しながら神の前に跪かない。私たちはどうやって神のみわざを期待します？初代教会の様子を見た時に、彼らは間違いなく神の前に祈る教会でした。神は喜んで彼らをお使いになり、神のみわざをなされた。我々は生きた神と交われるのです。私たちはその方の前にいろいろなものを持っていくことができるのです。そして我々は神のみこころを期待できるのです。神が喜ばれる教会は祈りの教会であり、神を愛する教会は神との交わりを楽しむ、祈りを行う教会です。皆さんの信仰生活を振り返って、あなたの生活における祈りは優先順位の中でどの位置にあるかです。朝起きて感謝の祈り、食事の前に感謝の祈りをするかもしれない。でも兄弟姉妹のためにとりなしをしていますか？誰かと一緒に祈り合いながら励ましていますか？一緒に主のみわざを期待できますか？祈りというのは主が私たち信仰者に与えてくださった素晴らしいギフトです。主を愛する人は神との交わりを喜びます。あなたの信仰生活はどうですか？

4. 「主のために喜んで犠牲を払う」ことで

主のために喜んで犠牲を払うことで私たちは神への愛を表すことができます。「犠牲」と言うと、「身命を捧げて他のために尽くすこと」とか「ある目的を達成するためにそれに伴う損失を顧みないこと」、「自分のことを顧みずにあることを達成しようとする」と、自分よりも神を愛する、自分のことよりも神のことを優先する。私たちが最初に見たのは「心を尽くし、思いを尽くし、」我々のすべてをもって神を愛することでした。あなたは神様を愛していますか？神のためなら喜んであなたのすべてを捧げることができますか？そのことによって私たちがどれほど神を愛しているかが明らかになります。

1) アブラハムの信仰：創世記 22 章 1 - 2、5 - 18

神はアブラハムに、ある大変難しい命令を与えました。あなたの愛する息子イサクを全焼のいけにえとしてわたしに捧げなさいと。驚くべきことは、その命令をアブラハムが受けて、行動に至るまでの時間です。アブラハムに「モリヤの地に生きなさい。そこでイサクを捧げなさい」と呼びかけられました。それを聞いたアブラハムは半年後にではなく、創世記 22 : 3 は「翌朝早く」と言います。この神の御声を聞いた後、アブラハムは翌朝すぐに出て行くのです。私たちはそんな気持ちで出て行くのでしょうか？自分の愛する子どもを全焼のいけにえとしてわたしに捧げろ、その愛する子どもよりもわたしを愛するかと問われているのです。アブラハムは翌朝早く出て行きます。そして 5 節にこうあります。アブラハムは若い者たちに言うのです。「あなたがたは、ろばといっしょに、ここに残っていなさい。私と子ど

もとはあそこに行き、礼拝をして、あなたがたのところに戻って来る。」と。そしてまさに刀をとって自分の子を屠ろうとした時に主の使いが天から「アブラハム」と呼びます。創世記 22 : 12 「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」と。アブラハムが愛する神のためだったら、自分の愛するすべてのものを犠牲にしても構わないと、アブラハムの愛が明らかに示されたことを神様が喜ばれたのです。

2) ダビデの罪：「イスラエル人の人口調査」 IIサムエル 24 : 13、24

もうひとり、同じように神が愛し、神を愛したダビデです。イスラエルは人口調査を行ってきました。民数記 1 章を見ると、一体誰がイスラエルに属するのかということで人口調査をしました。またダビデも人口調査を行いました。新約の時代になるとローマが人口調査を行いました。目的は課税対象の台帳を作るためです。その中でダビデが行った人口調査は神の前に正しくなかったのです。IIサムエル 24 章でそれを見ることができます。

ダビデは自分たちの中にどれぐらいの兵士がいるのかを数えさせたのです。そうすると、剣を使う兵士が 80 万人、ユダの兵士は 50 万人でした。なぜこれが神の前に罪だったのかと言うと、ダビデ自身も IIサムエル 24 : 10 で「私はほんとうに愚かなことをしました」と言っています。自分の行ったことが間違っていたことに気付くのです。ではなぜ自分の国にどれぐらいの兵士がいるかを調べることが罪だったのかと言うと、ダビデはその兵士の数に安心を求めたのです。彼は神ではなくて、どれぐらいの兵士がいるかに関心があったのです。イスラエルを助けてきたのは兵士の数ではなく、神だったのです。ところがダビデはその神ではなくてその兵士の数に関心を持ったのです。

そこで、そのことに気づいたダビデは「私は、……大きな罪を犯しました。」と言って罪の告白をします。そうすると神は、「七年間のききん」か、三か月間、あなたは敵から逃げるのか、それとも三日間の疫病なのか、三つの災いの中でどれを選ぶかとお尋ねになります。そしてダビデは三日間の疫病を選び、北はあのダン、ピリポ・カイザリヤから南はベエル・シェバに至るまで、7 万人の人々が亡くなるのです。そして主の使いがエルサレムに手を伸ばそうとする時に、ダビデは「罪を犯したのは、この私です。……あなたの御手を、私と私の一家に下してください。」と神に言います。すると神は、では「エブス人アラウナの打ち場」に上って行って、主のために祭壇を築きなさい。」(18 節)と命じます。

この並行箇所は I 歴代誌 21 章です。そこでは「アラウナ」ではなくて「オルナン」という名前になっていますが、同じ人物です。「打ち場」、つまり麦を脱穀するような場所に行って「祭壇を築きなさい」と。そしてダビデはそのとおりにそこにやって来るのです。アラウナがダビデが来るのを見てこう言います。「なぜ、王さまは、このしもべのところにおいでになるのですか。」と。私が来たのは祭壇を建てるためであって、そのことによって神罰が民に及ばないためであるとダビデが答えると、アラウナは「王様、すべての物を持って行ってください。全焼のいけにえのためには牛もいます。必要な物は全部ありますからどうぞ自由にお使いください」と言います。しかしダビデはその申し出を断ります。そして 24 節「いいえ、私はどうしても、代金を払って、あなたから買いたいのです。費用もかけずに、私の神、主に、全焼のいけにえをささげたくありません。」と言います。ダビデがなぜこの申し出を断ったのかと言うと、ダビデは神への捧げ物がどういうものか、その本質がわかっていたのです。彼は誰かからもらった物を神様に捧げたくなかった。捧げ物というのは自分自身の心からのものであって、喜んで犠牲をもって払うもの、神に捧げるものだということを知っていたからです。そこでダビデは「銀五十シェケル」でそこを買ったとあります。金額はそんなに高くありません。今の銀の相場で 3 万弱です。ところが I 歴代誌 21 : 25 を見ると、「金のシェケルで重さ六百シェケル」でこの場所を買っています。「銀五十シェケル」はその場所だけだったのです。そしてこの金「六百シェケル」というのはそのすべて全体です。

ダビデもアブラハムも神への捧げものは心からのものでなければならぬし、喜んで犠牲的に捧げるもの、それを神が喜んでくださるということを知っていました。私たちも誰かを愛していたら、そのためなら喜んで犠牲を払います。みことばが私たちに問うてくださっていることは、「あなたはわたしを愛するのか」ということです。余りものをもってわたしをあがめるのか、残りものでわたしをあがめるのか。それともあなたのすべてをもってわたしをあがめるのかと。この神はそれにふさわしいお方なのです。アブラハムは自分の愛する子どもよりも神が最優先されることを知っていたのです。ダビデもわかっていたのです。王だから人々はすべてのものを彼に提供するでしょう。でも神への捧げ物は私自身が自分の心から犠牲をもって捧げるものだ。

非常におもしろいのは、アブラハムがイサクを捧げたこの場所はモリヤの丘です。ダビデが金を払って買った所もモリヤの丘なのです。ここに神殿が建つのです。どういう意味があるのかわかりません。しかしアブラハムが捧げようとした所、ダビデが金を払って買った所、後にそこに神殿が建つのです。

私たちが今考えるべきことは、神を愛するという我々が一体どういうものをもって神を愛していることを証しているかです。神を愛する人というのは喜んで心から、しかも犠牲的に神に捧げるのです。自分自身のすべてを捧げようとするのです。ローマ12：1は自分自身を捧げることを「霊的な礼拝」と言っています。我々は自分のある一部だけを捧げるのではない。時間の一部だけを捧げるのではない。我々はすべてを捧げるのです。だってこの方は私の主人だから。代価を払って私を買ってくださったから。そうやってアブラハムは生き、ダビデは生きたのです。そして彼らを神は喜ばれたのです。

私たちが目指したい教会というのは、喜んで神に犠牲を払う人たちが集まっている教会です。神のために喜んで犠牲を払う、そういう個人が、そういう群れが神に喜ばれることがわかっています。マケドニアの教会は大変貧しい教会だったと、パウロがⅡコリント8：2で教えています。しかし彼らはその貧しさの中にあっても、しかも「激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となった」と。彼らはどれだけ自分たちの財布に残っているかなんてどうでもよかった。彼らは神を愛するゆえに神に喜んで捧げたと。間違いなく彼らは飢えたことはありません。なぜなら神はそのような信仰者を喜ばれ、そういう信仰者が集まっている群れを神様が喜びになることは間違いありません。

5. 「主から頂いた霊的賜物を用いて仕えている」ことで

1) 真実：各信仰者に霊的賜物が与えられた Iコリント12：11

私たちが信仰者となった、この救いにあずかった、それはゴールではありません。新しい本来の生活がそこから始まったのです。どんな生活かということ、少なくとも私たちは主が与えてくださった賜物を使うということです。しかもIコリント12：11に「みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださる」とあります。あなたの生まれながらの才能の話をしてしているのではない。あなたがイエス様を信じた時に神が霊的賜物を下さるのです。みんなに与えられています。それが与えられていない信仰者はどこにもいません。

2) 目的：与えられた目的 Iコリント12：6-7

では何のために与えられたかということ、同じIコリント12：7には「みな益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられている」とあります。つまり周りの信仰者の益のためにそれを用いなさいと言うのです。

3) 責任：各信仰者の責任 Iペテロ4：10

そしてそこには大きな責任がある。Iペテロ4：10には「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」とあります。教会というのは奉仕する人たちが集まっているのです。それぞれに与えられた賜物を生かして、教会に、主に仕えるのです。そしてあなたがその働きをすることによって、周りの人々が祝福されるのです。そういう群れなのです。それが神のご計画なのです。互いに仕え合っていきなさいと。教会に何のために来るのかということ、神を礼拝するために来るのです。そしてあなたの賜物を生かして互いに仕え合うことによってそれぞれの信仰が成長するためにです。あなたは働き人だということです。

6. 「主が憎まれる罪を憎む」ことで Iテサロニケ4：3-8

神への愛は主が憎まれる罪を憎むことで表されます。テサロニケの教会が本当に神の前に喜ばれていた教会だとパウロが記しています。その教会に宛てた手紙の中で「神のみこころは、あなたがたが聖くなること」だと言っています。Iテサロニケ4：3-7に「あなたがたが不品行を避け、各自わきまえて、自分のからだを、聖く、また尊く保ち、神を知らない異邦人のように情欲におぼれず、また、このようなことで、兄弟を踏みつけたり、欺いたりしないことです。なぜなら、主はこれらすべてのことについて正しくさばかれるからです。……神が私たちを召されたのは、汚れを行なわせるためではなく、聖潔を得させるためです。」とあります。みこころははっきりしています。個人としてもそうだし、群れとしても神に喜ばれる群れ、つまり聖さを求めて罪から離れる群れであることです。

7. 「主にお会いするのを待望する」ことで Iテサロニケ4：17-5：6、Iヨハネ3：2-3

主を愛する群れはどんな群れかということ、主にお会いするのを待望している群れです。イエス様にお会いする日を待っている群れです。パウロはこのIテサロニケ4章の中で、再臨の話をしました。そしてこう言っています。「こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。」と。「慰め合

いなさい」、励ましていきなさいと。同じ I テサロニケ 5 : 6 には「ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。」、その日は近いから目をさましましょうと。主を愛しているから、主に早くお会いしたいから「眠っていないで、目をさまして」その日を待望しよう。

こうして神を愛する教会の七つの姿を我々は見ることができます。

B. 「隣人を心から愛する教会」：

では、次は隣人を心から愛する教会とはどういう教会のなのか、我々は二つのことを見ます。一つは互いの霊的成長のために仕え合う教会です。もう一つは伝道に励む教会です。

1. 「互いの霊的成長のために仕え合う」

1) 愛し合うことは命令 I ヨハネ 3 : 23

私たちは兄弟姉妹を愛する者、隣人を愛する者たちだからです。皆さんご存じのように、愛し合うことは神からの命令です。I ヨハネ 3 : 23 には「神の命令とは、私たちが御子イエス・キリストの御名を信じ、キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです。」とあります。ですからどっちでもいい話ではない。神は愛し合いなさい、これはわたしの命令だと言うのです。

2) 救われたことの証拠 I ヨハネ 2 : 9、I ヨハネ 3 : 8-19、I ヨハネ 4 : 7-12、19-5 : 2

そして「愛し合う」というのは、その人が救われている証拠です。I ヨハネ 2 : 9 を見ると、「光の中にいると言いながら、兄弟を憎んでいる者は、今もなお、やみの中にいるのです。」と、大変厳しいこと、また恐ろしいことが記されています。この「兄弟を憎んでいる」というこの「憎む」という動詞は現在形です。憎むというのは「嫌悪」とか「継続してそのような状態にあること」です。「光の中にいると言いながら」、つまり自分はクリスチャンだと言いながら、もしあの兄弟のことが嫌いで、あの兄弟のことが憎くてたまらないというような状態をずっと継続している人がいるとしたら、ヨハネは「今もなお、やみの中にいる」、つまりその人は救われていないと言うのです。神の救いにあずかった私たちは確かに人間ですから弱いところがあって好き嫌いがあるかもしれない。でもずっとだれかを憎み続けること、ずっとだれかを許せないこと、それは大きな問題だと言うのです。赦されたことを感謝している者たちが、なぜそれを人に対して実践できないのかと。

I ヨハネ 3 : 8-19 でも悪魔と神の子どもの区別をしています。兄弟を愛さない者は神から出た者でないとヨハネは言います。なぜそれが大切なのか、I ヨハネ 4 : 12 を見ると「いまだかつて、だれも神を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされる」と。この「全うされる」というのは足りないものを満たすという意味です。神は霊です。つまり我々は誰も神を見たことがない。しかし、もし私たちが互いに愛し合うならば、愛し合っているあなたのうちに人々は神を見ると言っているのです。それがこの 12 節で教えることです。「もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされる」と。だから私たちは神を愛する者として、隣人を愛するのであり、兄弟姉妹を愛する者です。悲しいことに私たちは愛において大変問題のある者たちです。でもみことばが教えるようにキリストの愛をいただいたゆえに私たちは愛することができます。I ヨハネ 4 : 19-5 : 2 「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します（兄弟です）。私たちが神を愛してその命令を守るなら、そのことによって、私たちが神の子どもたちを愛していることがわかります。」、ヨハネは同じことを繰り返すのです。神の救いにあずかった人たちは、私たちが生まれながらに持っていなかった無条件の神の愛をいただくと。その愛をいただいたから、私たちはその愛でもって愛することができるようになった。それが救いなのです。だからヨハネが言うように救われる前と同じ状態で、あの人が嫌いとかあの人が好きだとか、そんなことで私たちが人を見ているのだったら考えなければいけない。本当にあなたは赦されたのかです。兄弟は愛し合いなさいと。まさにそれこそが救われたことの証拠であると。

3) 愛の実践

そして私たちはただ愛するだけではなくて、愛を実践することが必要です。

(1) 必要を満たす I ヨハネ 4 : 16-18

愛の実践というのは互いの必要を満たすことです。人々の必要を見てそれに答えていこうとします。兄弟が困っているのを見た時に憐れみの心を閉ざすような者にどうして神の愛がとどまっているかと I ヨハネ 4 : 17 で教えます。

(2) 信仰の成長を手助けする ローマ15：2、エペソ4：29、Iテサロニケ5：10

また同時に私たちは信仰の成長を手助けすることです。「隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。」、ローマ15：2で言います。「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。」(エペソ4：29)と。だから我々信仰者がこうして集まる時に何を考えるのかというと、人に仕えることによってどうやってその人たちの信仰が成長するのかです。そうやってお互いに信仰を高め合っていこうと、一緒に祈り、一緒にみことばを学ぶかもしれない。でもいずれにしろそうしてお互いがお互いを高め合っていく、それが隣人を愛することだと。

(3) 弱い者を助け励ます Iテサロニケ5：14-15、ガラテヤ6：10

弱い者、これは特に霊的に弱い人たちです。「小心な者を励まし」、落ち込んでいる人たちです。「すべての人に対して寛容で」あれと。そして「悪をもって悪に報いないように気をつけ」なさいと、Iテサロニケ5：14-15に記されています。「お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行なうよう務めなさい。」と。愛を持って接しなさいと。彼らの成長のために尽くしていきなさいと。人がたとえあなたに悪をしたとしてもあなたは悪をもって報いてはならないと。善を行いなさいと。神が喜ばれることを行っていきなさいと。

(4) 戒める Iコリント5：12、ルカ17：3、Iテサロニケ5：14-15

そして、兄弟を愛するがゆえに私たちが忘れてはならないのは戒めることです。もし兄弟が罪を犯した場合、愛ということばだけがひとり歩きしてしまって、愛するということは見ても振りをするものではありません。罪があったらそれを正しく諭すことが必要です。Iコリント5：12には「外部の人たちをさばくことは、私のすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。」とあります。我々の責任は外の人ではなくて、兄弟姉妹に対する責任です。またルカ17：3でも「気をつけていなさい。もし兄弟が罪を犯したなら、彼を戒めなさい。そして悔い改めれば、赦しなさい。」と。みことばがどうすべきかを我々に教えてくれています。兄弟姉妹を愛するがゆえに罪を犯していたらその罪を悔い改めるようにと教えるわけです。

4) 愛し合うことの大切さ ヨハネ13：35

なぜ兄弟姉妹が愛し合うことが必要かということ、もし我々が、この群れが互いを愛し合っているならば、互いを赦し合っているならば、神が喜ばれるような歩みを個人として、そして群れとしてしているならば、私たちの群れはこの世に対してすばらしい証をなすことになるのです。ヨハネ13：35でイエス様はこう言っています。「もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」と。我々がイエス様を信じているということ、この救いにあずかっているということが世の中の人たちに明らかになるためには、我々が愛し合っていることが必要だと。互いのために祈りましょう。自分の好きな人のためだけではなく、すべての人のために。ひょっとしたら私たちは人間的にあんまりあの人……と思うような人のために特に祈ることが必要かもしれない。何か悪いことが起こるためではない、神の祝福があるように。そして問題はその人ではなくてあなたや私の方です。完全な愛を持っていたら、イエス様のようにであったらすべての人を愛した。愛せないのは私たちに問題があるのです。

世の中だったらこう言うでしょう。もっと私が愛せるような人になったら私は愛するからと。神が言われていることは無条件で愛しなさいです。無条件で愛された私たちがその愛を示していきなさいと。それは神の助けによって可能なのです。少なくとも私たちは群れの中であって、なかなか愛することのできない人がいるならばその人たちのために祈って、そして神様その人ではなくて私を変えてください。あなたの愛を實踐できるように私を助けてください。こうして互いに対して愛を示していきなさいと。

2. 「伝道する」 Iペテロ2：12、Iテサロニケ5：15

パウロはIテサロニケ5：15で「悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行なうよう務めなさい。」と言います。周りの人たちはあなたを笑うかもしれないし、あなたのことを理解できないかもしれない。私たちは「すべての人に対して、いつも善を行な」えと。このメッセージを聞いたなら、何とハードルが高いと思います。「すべての人に対して」、人の悪に対して善で応じなさいと。だから私たちはこのことを聞いた時に神様に助けをくださいと行くのです。なぜなら神にあって可能だからです。そのことを我々は天に行くまで学び続けるのです。力は私のうちにあるのではない。力は神のうちにあるのです。だから神に助けを求めながら私たちは信仰生活を歩んで行くのです。

さて、きょう私たちは神が喜ばれる教会とはどんな教会なのかを見てきました。神を愛する教会として主が喜ばれる礼拝を捧げる者であり、主のみことばを信じ、そしてそれに服従する教会であり、主との交わりを楽しむ教会であり、主のために喜んで犠牲を払う教会であり、主からいただいた霊的賜物を用いて仕え合っている教会であり、そして主が憎まれる罪を憎む教会であり、そして主にお会いすることを待望しながら歩んでいる教会。同時に隣人を愛する教会として互いの霊的成長のために仕え合っている教会であり、そしてこのすばらしい救いのメッセージをまだ知らない人たちに対して語り続けている教会。みことばは私たちにどうあるべきかをちゃんと教えてくれます。聞いた私たちはそれを行うのか、行わないのか、その選択の責任があります。どうか一人ひとりが備えられた主の助けをいただきながら、主が望んでおられるように歩いていきましょう。個人としても、群れとしても、主の栄光が現されることは私たちの願いです。